慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	米山桂三先生を憶う
Sub Title	
Author	生田, 正輝(Ikuta, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.3 (1980. 3) ,p.167- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	米山桂三先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800315-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

米山桂三先生を憶う

生田正輝

戦禍のあともまだ生々しい三田の山に、昭和二十一年十月、現在の慶應義塾大学新聞研究所の前身である新聞研究室が、米山桂三先生の手によつて開設された。その時に、数人の友人たちとともにその研究生となつたのが、私が米山先生を知つたきつかけである。当時の先生は、おそらく四十代の初期であつたかと思うが、まことに若々しく、また、颯爽としたダンディであつた。生涯を通じてそれを貫かれたが、復員後の軍服姿の私たちには、そうした先生の姿は驚きであり、あこがれですらあつたことを思い出す。

考えてみるに、それ以来、学生時代はもちろんのこと、昭和二十二年に私が法学部助手となつてから、昭和四十七年三月三十一日をもつて先生が停年御退職を迎えられるまでの間も、また、名誉教授となられ、東海大学教授となられた後も、実に三十有余年の長きにわたつて、先生の御指導を賜り、公私にわたつていろいろと御世話になつた。かねてから病魔に侵され御療養中のことであつたとはいえ、いま、こうして先生を失つてみると、まことに淋しく、また、残念でならない。

先生はたしかに気性の激しい方であり、厳しい方であつた。助手や助教授の時代には度々お叱りを受けたこともあり、私の申し上げた意見が御気に召さず、不興をこおむつたこともあつたが、それもいまとなつてはなつかしい思い出となつてしまつた。先生のトレード・マークともいうべき、あの毒舌に二度と接し得なくなつたと思うと、あらためて淋しさがこみあげて来る。しかし、反面、先生には気の弱い淋しがりやの側面もあつたし、人なつこいお坊ちゃんの気質も持ち合わせておられた。先生とベロベロになるまで銀座のバーからバーへとはしごをして歩いたことも、昨日のことのように思い起される。また、私が学部長に就任した時に、わざわざお祝いに来ていただき、いろいろと激励されたことも、忘れ得ぬことどもである。

こうした先生の思い出を綴れば限りがないが、やはり米山先生について語らねばならないことは、その学問上の業績である。先生は、極めて頭脳明晰な方であり、鋭い洞察力と先見の明の持主であつたが、それだけに、学問的には絶えず時代にさきがけて新しい分野を開拓され、先駆的な業績を残された。

今日における、世論研究、マス・コミュニケーション研究、政治心理学、社会心理学、産業社会学などのさまざまな領域で

のめざましい研究の発展に思いを致す時、先生の先見の明と大きな貢献とを思わざるを得ない。

先生は、昭和四年四月に法学部助手になられると同時に、昭和八年まで、ロンドン大学、ベルリン大学を主として英、独に留学されたのであるが、とくにラスキー教授について社会学、政治心理学を研究された。帰国後は、社会学の講座を担当されるかたわら、世論や宣伝の研究に従事され、「戦争と世論」（昭和十七年）、「思想闘争と宣伝」（昭和十八年）、「民主政治と輿論」（昭和二十一年）などの著書を出版された。

戦後は、これらの研究領域に加えて、社会調査、産業社会学、広告の研究、政治心理学、看護社会学などの未開拓な分野に挑まれ、次々とすぐれた論文を発表し、日本の学界をリードされた。先生の真骨頂はまさしくそうした新しい分野のパイオニヤーであつたというところにあり、「輿論と政治」「輿論調査の方法」「輿論の社会学」（いずれも昭和二十三年）、「広告の社会学」（昭和二十七年）、「社会調査――労働・工場・漁村」（昭和三十年）、「産業社会学序説」（昭和三十五年）などの著作は、いずれも先駆的な業績として高く評価されている。

さらに、先生について忘れてならないことは、その厳しい指導によつて多方面にわたつて多くの門下生を育てられたことである。私はもちろんであるが、今日、マス・コミュニケーションの研究、文化人類学、社会学、社会心理学、産業社会学、政治心理学などのさまざまな領域において、多くの研究者が輩出している。それらの者たちが、それぞれの分野の第一線においてはなばなしく活躍していることを思うと、あらためて先生に深い感謝の意を表せざるを得ないのである。

こうした学問研究に加えて、先生は、新聞研究所長、大学院社会学研究科委員長、法学部長、大学院法学研究科委員長などの要職を歴任され、御退職後も、極く最近まで東海大学政治経済学部長として重任を果された。また、学界にあつては、日本社会学会理事、日本広告学会理事、日本新聞学会会長などとして大きな功績を残された。さらに、海外にあつては、ハワイ大学訪問教授として、また、数々の国際会議の日本代表として活躍されたのである。

いま、こうして先生の七十有余年の生涯をふりかえつてみると、あらためてその偉大さを思わざるを得ない。また、その生涯の五十年になんとする長い間を、慶應義塾と共に歩んで来られたことを考えると、慶應義塾が、そうして法学部が先生に負うところ極めて大であつたことを痛感するのである。

もとより、私個人は先生なくしては今日はない。私に、当時全く新しい分野であつたマス・コミュニケーションの研究に入ることを示唆されたのも先生であり、私がまがりなりにも、今

日マス・コミュニケーションあるいはコミュニケーションの研究者として一人だちし得たのも、先生の御指導の賜物である。今年の六月、先生がかつてその創立委員として、また、後にはその会長として非常な努力を傾けられた、日本新聞学会の会長に私が推された際に、まず、思いに浮んだのは米山桂三先生のことであつた。

先生の衣鉢をついで一層の努力を傾けることが、残された私たちの先生への報恩の道であると思うが、それにしても先生を失つたことはかえすがえすも残念である。ただただ、米山先生の冥福をお祈りするのみである。

米山桂三先生追悼之記

十時嚴周

一九七九年十一月十七日、米山桂三先生は逝去された。享年七十三歳であつた。

先生に初めておめにかかつたのは、一九五〇年四月下旬、『社会調査』という特殊講義に出席したときであつた。受講者は七、八名であつた。他に必修科目『産業社会学』を開講されていた。必修科目は受講者が多く大教室で講義されていた。特殊講義『社会調査』の受講者はさらに少なくなつたので、直接お話しする機会に恵まれるようになつた。当時、先生は四〇代の半ば、戦前からの先生の第一研究主題『輿論研究』から、第二の研究主題『産業社会学』に移られた頃であつた。その前年度に発表された論文「産業社会学――その成立と発達――」（『法学研究』二二巻六・七号）は、私が本気で読んだ最初の学術論文であつた。

当時、私は長い療養生活から三田に復学した直後であつた。終戦直前、勤労動員のさなか突然喀血し、爾来約五年間、神戸須磨浦の結核療養所で生死の境を彷徨していた。大気安静療法しかなかつた時代である。海のみえる楠林の丘に横臥し、毎日青空を凝視し続けていた。夏は烈日の陽ざしを緑蔭に避け、真冬は凛冽の空気に肺を曝すべく、大気のもとに横臥し続けた。トーマス・マンの『魔の山』に魅せられたのもその頃である。左肺上部鎖骨下の鶏卵大空洞は、確実に、死への静かな接近を意味していた。毎日、死のことばかり考えていた。療養雑誌『保健同人』を読み始めたのもその頃であつた。鶏卵大空洞を壊死させることこそ、起死回生の唯一の途であることを理解した。一九四七年、左肺胸廓成形手術を受けた。肋骨九本を摘出する手術であつた。術後、さらに二年半、療養所で黙思する生